

## 北海道における単独で造巢行動をしたオオワシ *Haliaeetus pelagicus* の記録

深津 恵太\*

A brief record of a Steller's sea eagle (*Haliaeetus pelagicus*)  
building a nest alone in Hokkaido

Keita FUKATSU\*

### はじめに

オオワシ *Haliaeetus pelagicus* はコリヤーク地方からカムチャツカにかけて、オホーツク海沿岸、アムール川流域、サハリンで繁殖する。日本では繁殖は未確認で越冬のために飛来する渡り鳥である（日本鳥学会2024）。筆者は北海道東部において、つがい相手のいない単独のオオワシ成鳥による造巢行動を観察した。結果的にこの個体は繁殖には至らなかったが、オオワシの造巢行動が国内で観察された事例は初めてであると考えられたため報告する。

### 営巣環境

内陸の河川や沼に囲まれたヤチダモ *Fraxinus mandshurica* の優占する湿地林。

### 営巣木

胸高直径35cmのミズナラ *Quercus crispula* var. *crispula* で、小河川から5mほどの距離にある。巣材は地上から7mほどの高さに、幹とその横枝にかけて組まれ、高さ1m、幅1.5mほどであった（図1）。



図1 営巣木とオオワシ。

筆者は2025年2月にはこの巣の存在を認識していたが、その時は巣の近くでオオワシを確認していない。また、その時点での巣の大きさは造巢行動を確認した同年4月12日と比較すると明らかに小さく、中型猛禽類が使用するサイズであった。

### 個体情報

本事例の個体は森岡ほか（1995）を参考にして、羽毛の色から成鳥と判断した。また同じく森岡ほか（1995）ではオオワシ成鳥の嘴の形態的特徴について『上嘴と下嘴の輪郭線は、雄では基部でほぼ平行であるが、雌では上嘴が盛り上がっている。』としている。本個体は上嘴と下嘴の基部の輪郭線で上嘴に膨らみが確認できたため雌個体と判断した（図2）。

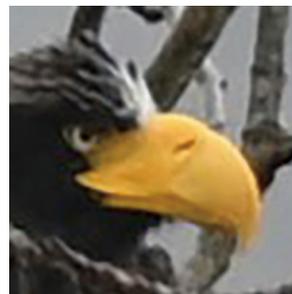


図2 個体の形態的特徴。上嘴と下嘴の輪郭線が基部で平行ではない（上嘴が盛り上がっている）ため、雌個体と考えられる。

造巢行動確認日 2025年4月12日

### 造巢行動

観察には望遠鏡にビデオカメラを接続し、オオワシの行動に影響を与えないと考えられる遠方より巣の動画撮影を行った。同時に10倍の双眼鏡を用いて広くオオワシの行動を観察し、行動記録を付けた。後日、映像と観察記録を基に行動内容を分析した。その結果、本個体は13:29~14:57までの88分間継続して造巢行動を行っていた。具体的には①木の枝を折り巣に運び

\* 北方環境研究所 Institute of northern environment

込む(図3)。②巣の上で木の枝(巣材)を動かす(図4)。③巣の上を歩き横枝にパーチする。④巣から飛び立つ。これら①～④の行動を5回繰り返した。また、造巣行動中にこの個体以外のオオワシは確認できなかった。

その後、5月中旬まで営巣地周辺で継続的に本個体を観察できたが、他のオオワシ個体は未確認であった。5月下旬以降は営巣地周辺でオオワシを確認することは出来なかった。

本報告のように、つがい相手のいないオオワシ単独個体による造巣行動は、既知の繁殖地においても稀な事例と思われる。また、日本国内でのオオワシの繁殖は未確認でもあり当該地で今後つがいが形成され、交尾、産卵、抱卵、孵化といった一連の繁殖行動が見られるようになるのか継続して観察したい。



図3 木の枝(矢印)を折り、嘴でくわえるオオワシ。



図4 巣の上で木の枝(巣材)を動かすオオワシ。

#### 謝辞

本報告をまとめるにあたり斜里町立知床博物館元館長の中川元氏には国内外におけるオオワシの繁殖状況についてご教示いただいた。感謝申し上げます。

#### 引用文献

日本鳥学会, 2024.日本鳥類目録改訂第8版. 日本鳥学会, 東京.

森岡照明・叶内拓哉・川田 隆・山形則男. 1995. 図鑑日本のワシタカ類. 文一総合出版, 東京.